才 木 古 墳

福岡県糟屋郡須恵町所在古墳の調査

この報告書は、平成元年7月20日から同8月22日まで、須恵町大字植木字才木にあった古墳の発掘調査の記録です。

調査は、株式会社福原組からの委託を受け、福岡県教育委員会の指導の下に行いました。

開発と保護という現実の中で、多くの方々にご理解を頂き、私達の先人達の文化 遺産である古墳の発掘調査を無事終えることができました。

また、この報告書は、当地にあった古墳の貴重な記録として、後世に伝えることができると思います。

文末になってしまいましたが、報告書刊行までの間、多大なご協力を頂きました 株式会社福原組の皆様、福岡県教育委員会、ならびに作業を手伝って頂きました皆 様方に深くお礼申し上げます。

平成2年3月31日

須恵町教育委員会 _{教育長} 嶌 末 友三郎

例 言

- 1. 本書は、須恵町教育委員会が株式会社福原組から調査費を受託して、倉庫建設 に伴う造成のため破壊される才木古墳を平成元年7月20日から8月22日までに 発掘調査した報告書である。
- 2. 遺物の整理は、鉄器を九州歴史資料館の横田義章参事補佐、土器は岩瀬正信の 指導、図面作成については調査担当者の外に豊福弥生・原カヨ子・鶴田佳子・鬼 木つや子が従事し、掲載写真は遺構を池辺元明、遺物を九州歴史資料館の石丸洋 技術主査が担当した。また、空中写真は「예空中企画」に依頼した。
- 3. 本書の執筆は I を高山慶太郎が、他の執筆と編集には池辺があたった。

本文目次

		頁
I	はじめに	1
II	遺跡の位置と環境	3
Ш	調査の内容	
	1.1 号 墳	4
	(1) 墳 丘	4
	(2) 主 体 部	5
	2.2 号 墳	6
	3. 出 土 遺 物	8
N	お わ り に	11

図 版 目 次

	本文対照	頁
図版 1	(1) 才木古墳遠景(東から)	3
	(2) 才木古墳遠景(南西上空から)	3
図版 2	(1) 才木古墳遠景(北東上空から)	4
	(2) 才木古墳遠景(直上から)	4
図版 3	(1) 発掘後全景	4
	(2) 石 室 全 景	5
図版 4	(1) 石室北側壁	5
	(2) 石室南側壁	5
図版 5	(1) 石室西側壁	5
	(2) 石室東側壁	5
図版 6	(1) 石室床面	5
	(2) 遺物出土状態	8
図版7	出 土 遺 物	8
	挿 図 目 次	
		頁
第1図	遺跡分布図(縮尺 1 / 25,000)	2
第2図	才木古墳位置図(縮尺 1 / 5,000)	3
第3図	才木古墳地形測量図(縮尺 1 / 300)	4
第4図	才木古墳地山面地形図(縮尺1/300)	5
第5図	1号墳墳丘土層図(縮尺1/60)	6
第6図	1号墳石室実測図(縮尺1/40)	7
第7図	ガラス小玉実測図(実大)	9
第8図	鉄器実測図(縮尺1/3)	9
第9図	出土土器実測図(縮尺1/3)	10
	表目次	
	ガラス小玉計測表	

Iはじめに

この発掘調査が行われる原因となったのは、株式会社福原組の用地整備に伴う造成である。計画の始めに福原組は須恵町教育委員会に対して埋蔵文化財の有無について照会を行った。連絡を受けた福岡県文化財保護指導員及び福岡県教育庁福岡教育事務所は担当職員を派遣して現地の分布調査を実施した結果、1基の円墳を確認し、さらに石材の散乱と地形から他に2基の古墳が存在が推定されることを回答した。

この結果に基ずいて、福原組と保存について協議を行ったが計画変更は極めて困難な状況であるため発掘調査を実施し、記録保存の措置を構ずることとなった。調査費用は会社に負担願い、 須恵町の主体で福岡県教育庁文化課から担当職員を派遣を受け実施した。

調査関係者は次のとおりである。

須恵町教育委員会

総括·庶務

教	育			長			嶌		末	友三郎		
教		育		次		長		武	井	宏	之	
社	会	孝	女	育	課	長		Ш	添		光	
社	会	教	育	課	主	幹		稲	永	美	弘	
課		長		補		佐		吉	松		清	
須恵町立歴史民俗資料館								高	Щ	慶	大郎	
								大	場	通	子	

発掘調查

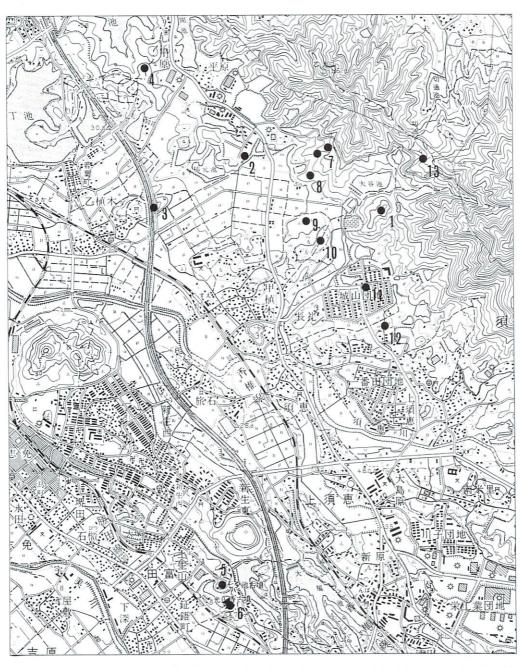
福岡県教育庁指導第二部文化課 記念物係 技術主査 池 辺 元 明福岡県教育庁福岡教育事務所 社会教育課 技術主査 小 池 史 哲

調査は、株式会社福原組代表取締役社長福原喜久松氏の深いご理解とご協力を得た、また、県 文化財保護指導員平ノ内幸治、筑紫野市教育委員会の奥村俊久、伴田博明各氏の指導と援助を受 けた。記して謝意を表したい。

現場作業には下記の方々の協力を得た。

安河内勘三郎・稲永カズエ・合屋ナミ子・太田義光・真野シズ子・安達ミト・百済キョノ・ 福島タミ子・前原ハツエ・北村ハナ子・見月正史

また、学芸員実習生の山本由美・竹下八愛・仁戸田知子が参加した。



1. ヨムギ古墳 6. 光正寺古墳 7. 柳坂古墳群

2. 才木古墳

3. 乙植木古墳群

4. ヨシガ浦古墳 8. 尾黑古墳群 9. 大塚古墳群

5. 七夕池古墳

11. 城山古墳群 12. カヤノ古墳群

13. 切通古墳

10. 尾黒南古墳群

第1図 遺 跡 分 布 図 (縮尺1/25,000)

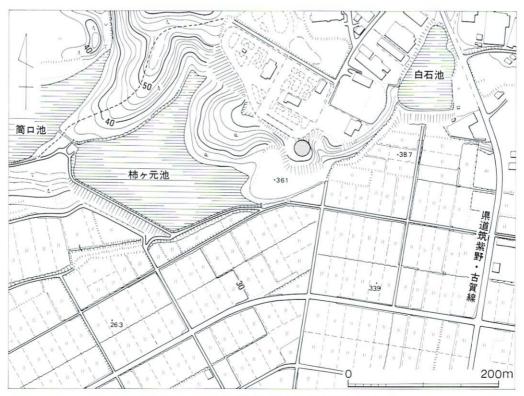
Ⅱ 遺跡の位置と環境

オイキ 才木古墳は、福岡県糟屋郡須恵町大字植木字才木に所在する。

須恵町は、東に宝満・三郡・砥石・若杉等の各山がある三郡山地が南北に連なり、西側は四王 寺山から北西へのびる月隈丘陵に狭まれた盆地状の地形を作り、平野部は狭長で中を須恵川・宇 美川の小河川が貫流する。遺跡地はその山麓や丘陵地に多くみられる。才木古墳は若杉山から続 く、乙犬山西麓からのびた丘陵上に構築されている。

周囲の古墳は、北側に6世紀前半のヲシガ浦古墳、東側には昨年町立中学校建設で調査された6世紀後半のヨムギ古墳、西側の丘陵上には竪穴系横口式石室など古代の横穴式石室を主体部とする乙植木古墳群や天神山古墳群がある。南側には団地造成のため消滅した城山古墳群などが群在している。さらに南側には大円墳の七夕池古墳、古式の墳丘を有する光正寺前方後円墳などの著名なものがある。他にも、柳坂・切通・尾黒山・尾黒南・神の木・旅石などの数基からなる古墳群がある。

残念なことに近年の開発の中でその実態が不明なまま消えていった古墳も数多い。



第2図 才木古墳位置図(縮尺1/5,000)

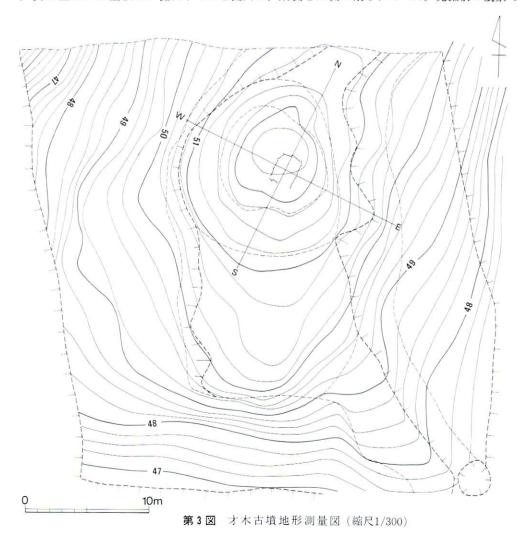
Ⅲ調査の内容

1.1 号 墳

(1) 墳 丘 (図版1~3、第3~5図)

東側の乙犬山(標高185m)から西側にのびる丘陵から、南側へ枝状に突出す支丘陵上の標高約52m付近に構築された円墳である。南側の水田面との比高は約20m近くある。

この丘陵の、北東側は工場建設等の造成で、南西側は農地等の開墾で開発が進み、調査区は孤立して状況にあった。雑木伐採後の遠目には墳丘の残存は良く写ったが、破壊はかなり進んでいた。墳丘盛土は石室腰石が露出するほど流出し、東側と西側は削られていた。発掘前の観察で

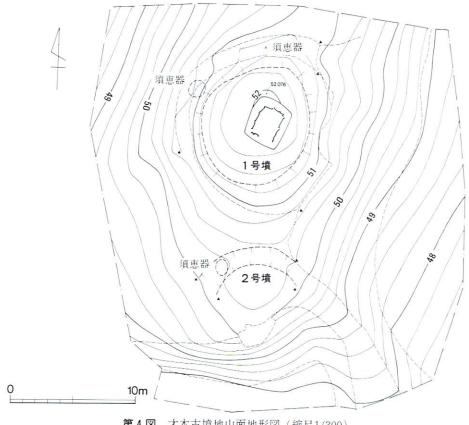


は、東西が約12.5m、南北が約14mを測る楕円形に近い形状を呈していた。みかけの高さは残り のよい所で1.5m程であった。

墳丘調査の結果、盛土はほとんどなく、表土の腐植土を除去すると、明褐色土を狭み、地山の 赤褐色土となる。地表からは最も深い所で約30cmを測る。現状での地山面の整形は、噴頂部で東 西径8.6m、南北径9.3mの緩やかな傾斜で平坦面に近い削り出しが行われ、さらに傾斜を増し て、東西径10.5m、南北径12.5mの基底部をつくる。削られた部分を復原すると南北径に近い規 模でほぼ円形になろう。溝は北側から西側(第4図▲印)にかけて検出した。

(2) 主 体 部 (図版3~6、第6図)

主体部は、南北3.5m、東西3.1mの長方形の掘方内に構築されるが、石材を扱き取られ破壊を 受けていた。腰石は、東壁2枚、西壁3枚、北壁2枚、南壁1枚が残る。南側は1枚ないし2枚 の腰石を失う。北壁右側の腰石は敷石よりやや浮いた状態であるが、他は立てて据えられてい た。内法は、長さ約2.3m、幅は北側で1.65m、南側で約1.8m、中央で1.85mを測る長方形を呈 する。西壁には横積みされた2段目がかろうじて残る。石材はすべて雲母片岩でもろい。

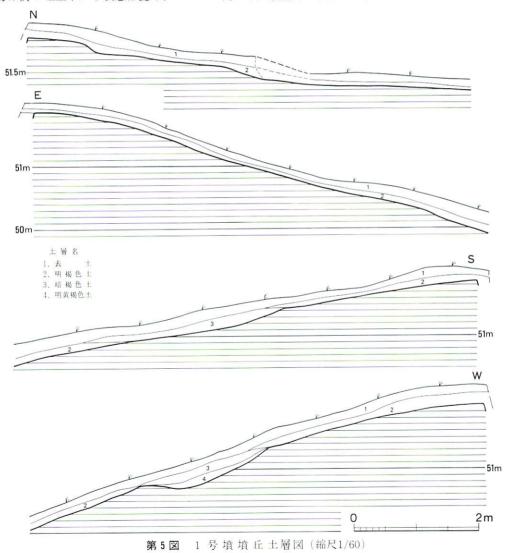


第4図 才木古墳地山面地形図 (縮尺1/300)

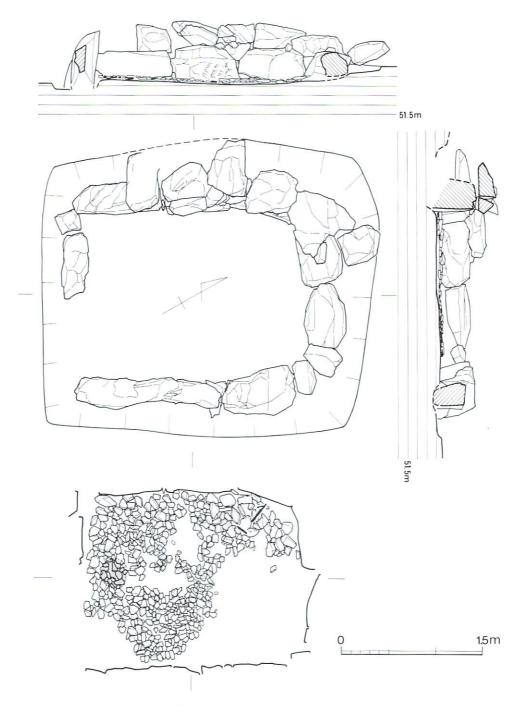
西側中央の腰石表面に工具痕が残る。敷石には10cm前後の礫を使用している。現状では竪穴式石室の様な形態を呈し、また、玄門部、墓道等の確認もできず明確な結論はだせないが、横穴式石室ではなかろうか。遺物は、石室床面からガラス小玉、鉄器(刀・鏃)、周溝から須恵器が出土した。

2.2 号墳

2号墳は1号墳の南側に接する形で築造されたと考えられる。削平の受け詳細は不明である。 北側で弧状の溝を検出した。幅 $1.3\sim1.4$ m、深さ $5\sim10$ cm程が残るだけである。主体部を想定で きる地点にトレンチを設定したが、カクランが著しく掘力等を確認することはできなかった。遺 物は溝の埋土中から須恵器墾片、トレンチ内から短頸壺片が出土した。



-6-



第6図 1号墳石室実測図(縮尺1/40)

また、2号墳南東側のガケ上端部に石材散乱していたが、確認することはできず、古墳に使用されたものであるか否かは不明である。

3. 出 土 遺 物

装身具(図版8、第7図)

ガラス小玉($1\sim45$) 1号墳石室南側壁から20cm北側付近を中心にした床面敷石間(第 6 図 スクリーントーン部分)から検出した。ばらばらで連なった状態は観察できなかった。色調は、コバルトブルーとブルーグリーンの 2 種がある。大きさは径 $2.45\sim6.6$ mm、厚さ $1.4\sim4.0$ mmまであり、形態は上下が平滑になるものが主である。一連の糸に通すと10.3cmを測る。総重量は2.3gである。全体の計測値は表1に示すとおりである。

表1 ガラス小玉計測表

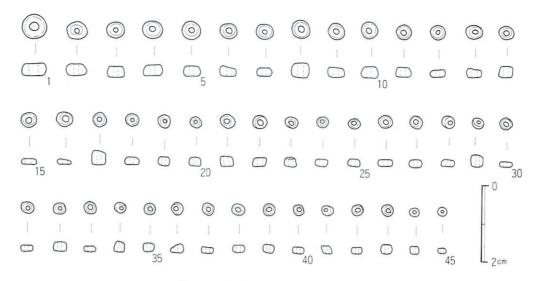
単位 (mm)

No.	径	厚	孔径	色	調	No.	径	厚	孔 径	色	調
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 22 22 23	6.6 5.25 4.7 5.0 4.9 4.4 4.3 4.8 4.15 4.3 4.2 3.85 4.0 3.85 4.0 3.45 3.45 3.55 3.5 3.5	3.65 3.1 3.15 3.25 3.2 2.55 2.45 4.0 2.8 3.15 2.75 2.4 2.45 2.95 1.6 1.7 3.4 2.0 2.3 2.25 2.65 2.65 2.65	2.35 1.8 1.7 1.45 1.6 1.6 1.3 1.7 1.45 1.65 1.45 1.65 1.35 1.45 1.15 1.2 1.15 1.6 1.15	ブルー: コバルー: ブルバー・ ブルバー・ ブルバー・ ブルバー・ ブルバー・ ブルバー・	トブリーン ・ブリーン ・ブリー ・ブリー ・ブリー ・ブリー ・ブリー ・ブリー ・ブリー	24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45	3.3 3.3 3.55 3.4 3.55 3.0 3.1 3.1 3.1 3.1 3.2 3.3 3.1 3.1 3.0 3.0 3.1 3.1 3.1 3.1 3.1 3.1 3.1 3.1 3.1 3.1	1.9 2.0 1.75 2.0 1.95 3.0 1.25 1.65 2.4 2.55 2.1 2.7 1.75 2.0 2.15 1.8 2.0 1.65 2.4 2.0	1.15 1.2 1.4 1.5 1.25 1.2 1.3 1.15 1.45 1.5 1.1 1.3 1.1 1.15 1.3 1.1 1.10 0.95 0.95	コバル・スカイブルー・フバル・ブルー・フバル・ファル・ファル・ファル・ファル・ファル・ファル・ファル・ファル・ファル・ファ	ブリーン ,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,

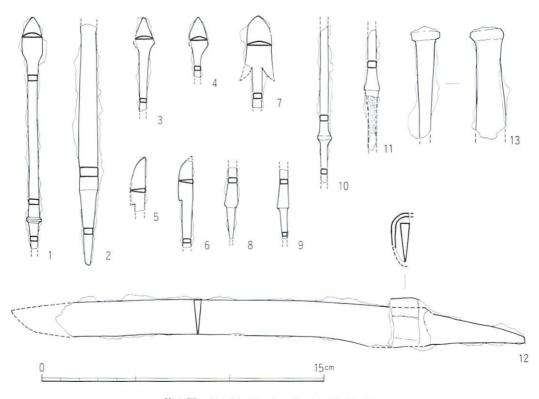
鉄器(図版8、第8図)

1号墳石室から、武具(鏃・刀)、工具(不明鉄器)が出土した。

鉄 鏃 $(1\sim11)$ 石室西壁側の床面敷石の上、間から $1\cdot 2\cdot 10$ が出土した。他は石室内カクラン埋土中からの出土である。破片資料で20余点あるが、接合できないため数は把握できない。すべて細根式で、形態的には、 $1\cdot 3\cdot 4$ 、 $5\cdot 6$ 、7に分けられる。 $1\cdot 3\cdot 4$ は片丸造で、1は、茎部の一部を欠く、現存長12.1cm、身部幅1.1cm、頸部幅0.5cmを測る。断面形は長方形を呈する。2は、身部を欠く、現存長12.6cm、頸部幅1.0cmを測り、断面形は長方形を呈し、厚さ0.5cmを測る。 $5\cdot 6$ は片刃式の鏃で関を有する。7は、片丸造膓抉式である。一方の逆刺を欠



第7図 ガラス小玉実測図(実大)



第8図 鉄 製 品 実 測 図 (縮尺1/2)

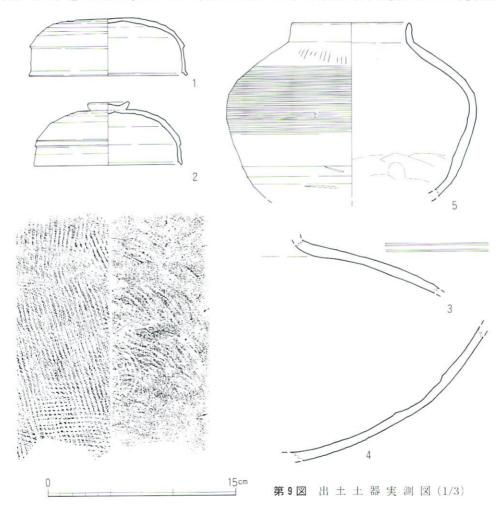
く。8~11は篦被を有する破片である。11には木質部の残存がみられる。断面形はいずれも長方 形を呈する。

短 刀 (12) 鉄鏃とともに西壁側の敷石上から検出した。鋒を欠く。平造りで内反りの傾向が認められる。現存長24.7cm、身部長19.5cm、茎部長5.1cm、身幅1.8cmを測る。関部に幅約1.5cmの縁金具が付く。茎の目釘穴は銹のため不明である。

不明鉄器(13) 長さ5.9cmを測り、断面形は長方形を呈する。上端は叩かれてつぶれているように見える。下端はさらにのびて刃がつくと思えるが銹のため不明である。タガネあるいはノミかも知れない。

須恵器(図版8、第9図)

蓋杯・蓋(1・2) 1号墳北側の溝の地山直上から2と重なり天井部を下に向け出土した。 周囲からは、他に土器片等はまったく検出されなかった。口縁部を若干欠損するがほぼ完形品で



ある。口径12.6cm、器高4.6cmを測る。天井部はやや平坦で、口縁部はほぼ直に下る。端部は外方へつまみ出され内面に段をもつ。天井部と口縁部の境に鋭い稜をもつ。稜径12.4cm。天井部外面頂部はナデ、他は左まわりの回転へラ削り調整。口縁部外面と内面はヨコナデ調整。暗青灰色を呈し、胎土及び焼成は良好である。2は有蓋高杯の蓋かもしれない。口縁部を1/3程欠損する。口径11.8cm、器高4.95cmを測る。中凹みのつまみをもつ。つまみ径3.3cm、高さは、0.5~0.6cmである。天井部は1に比して丸味をもつ。口縁部との境の稜は短く鋭い。稜径は11.65cmを測る。稜の上に浅い凹線が一巡する。口縁部は1と同様であるが、短く厚い。天井部外面1/2は右まわりの回転へラ削り、内面はナデ、他はヨコナデ調整。

甕 (3・4) 3は甕肩部片である。外面は口縁部との境にカキ目を施し、他は平行タタキがみられる。焼成時に付着した土器片と砂が付着し、自然釉がかかる。内面はナデ。4は胴部下位から底部にかけての破片である。外面は疑格子タタキ、内面は同心円のタタキ痕が残る。上部はタタキの後ナデ調整。3は1号墳西側溝の出土。4は1号墳西側溝と2号墳の溝と考えられる部分からものが接合した。

短頸壺(5) 口縁部片と胴部片であるが同一個体と考えられるため図上復元した。復元口径 9.6cm、胴部最大径は20cm程であろう。 2 号墳石室の推定部のカクラン埋土中からの出土である。 口縁部はぼ直に立上り、端部は丸い。最大胴部は中位よりやや上にあり、なで肩である。肩部から胴部中位の外面はカキ目、胴部下位外面は回転ヘラ削り、内面はナデ調整。他はヨコナデ。自然釉がかかる。

N おわりに

調査の結果、径約12.5mに復原できる円墳の1号墳と円墳の周溝と考えられる溝を検出した。また、調査区南東隅のガケ上端部にも古墳の石室に使用されたと考えられる石材が散乱していたが調査を行うには危険が多く確認することはできなかった。さらに、付近には古墳があったという話も多く、工場団地造成等で数基の古墳が破壊された可能性があり、当初は古墳群を形成していたものと思われる。

1号墳は地表に腰石上部が露出しており、残存状況は極めて悪く、石室掘方も数cm確認しただけで石室の形態を知る手がかりにはならず詳細は不明である。

石室からは、ガラス小玉と鉄器が出土したが築造時を決定するまでにはいたらない。土器は西側周溝から須恵器甕の破片と、北側周溝から杯蓋が2個体出土している。このうち、杯蓋は大阪府陶邑古窯跡群編年のTK208型式に相当するものと考えられる。

2号墳の墳丘・石室については不明である。出土土器から1号墳とはかなり時期差があろう。

図 版





1. 才木古墳遠景(東から)

才木古墳遠景(南西上空から)



1 才木古墳遠景(北東上空から)

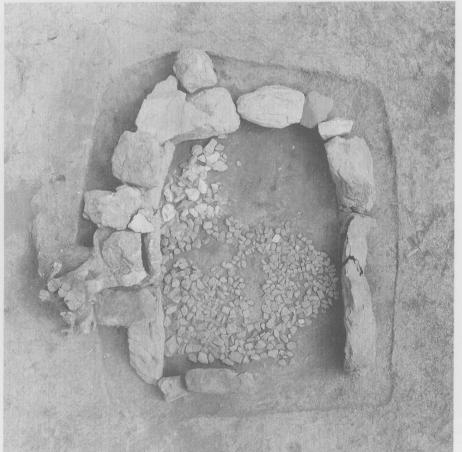


2. オ木古墳遠景(直上から)



1. 発掘後全景





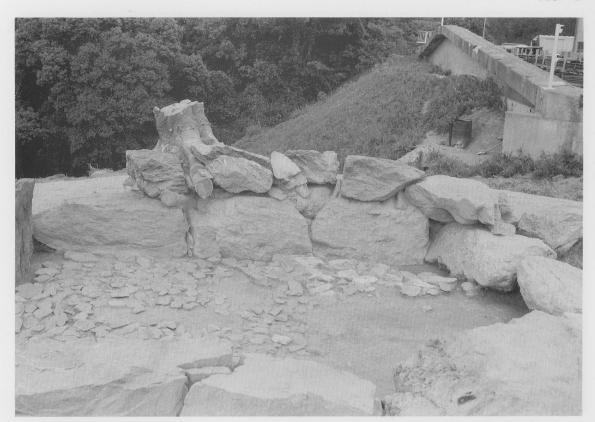
2. 石室全景



1. 石室北側壁



2. 石室南側壁



1. 石室西側壁



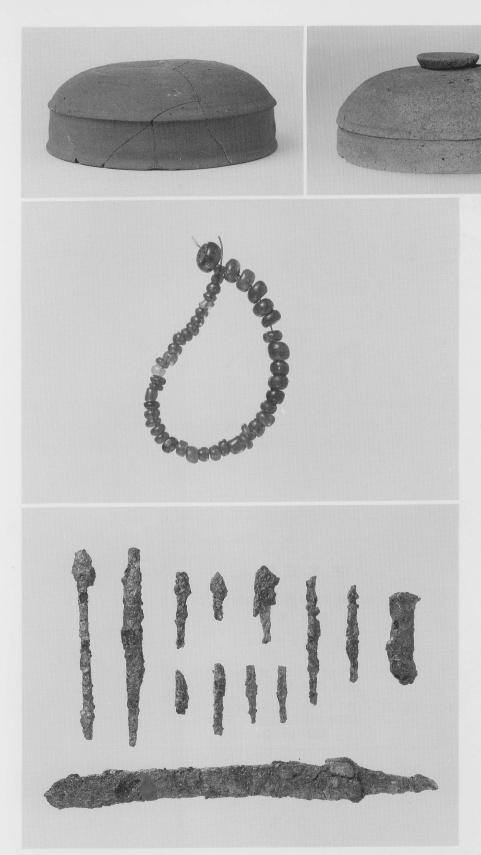
2. 石室東側壁



1. 石室床面



2. 遺物出土状態



出土遺物

才木古墳

須恵町文化財調査報告書 第 4 集

平成2年3月31日

発行 須恵町教育委員会 糟屋郡須恵町上須恵117

印刷 アオヤギ株式会社 福岡市中央区渡辺通2丁目9の31 電話 092 (641) 1431